

横山ゆずり作 「背負う人」

<前編>

テーマ 人生はドラマ、あなたが主人公です。この度も、「この指ドラマ館」によろこそ。

(効果音) (車の通りの激しい交差点。クラクション。急ブレーキ。衝突音。救急車。)

市村隆の母 隆、隆、聞こえる？ 隆！

菊地真理子 隆、分かる？ 大丈夫？

市村 隆 うう……。あ、母さん、真理子……。おれ、どうしてここに……。

母 よかった、気がついたのね。あなた、交通事故に遭ったのよ。救急車でこの病院に運ばれて、もう丸一日、眠ったままだったのよ。

真理子 本当によかった、意識が戻って。このまま目を覚まさなかったらどうしようと思って、わたし……。 (涙声になる)

母 真理子さんね、心配して、ずっと付いていてくれたのよ。とにかく、命に別状がなくて、ほんとによかったわ。

隆 交通事故……？ そうか、おれ、会社の営業の途中で……。右折しようとした時、対向車が……。そこからは、覚えてない……。

母 骨折が何か所かあるけど、ちゃんと治るからって、先生が。もう少し眠ったら？

隆 うん、そうする。何だか頭がズキズキ痛むんだ。母さん、真理子、心配かけて本当にごめん。これじゃ、結婚式も延期しなくちゃならないな。

真理子 いいから、気にしないで。今は何も考えないで休んで。

隆 ああ、ありがとう。

(効果音) ('ガチャ'と病室のドア、閉まる)

(病院の廊下で話す、母と真理子)

母 真理子さん、ごめんなさいね、隆がこんなことになってしまって。来月には結納の予定だったのに。お宅のご両親にも、本当に申し訳なくて。

真理子                    そんな、お母様、気になさらないでください。うちの両親も、とにかく隆さんが完全に元気になってくれるのが第一だって言ってますから。それに……、わたし、今度のことで、自分にとって隆さんがどんなに大切な人が、改めて分かったんです。だから、無事でいてくれただけで、本当にうれしいんです。

母                        真理子さん……。ありがと、そんなにまで隆のことを思ってくれて。あの子、幸せだわ。これからも隆のこと、よろしく願いますね。

真理子                    こちらこそ。わたし、会社の帰りとか、なるべく毎日病院に顔を出しますから。

タイトル                横山ゆずり作「背負う人」その前編

真理子(ナレーション) わたし、菊地真理子。24歳のOL。クリスチャンの親の希望でミッションスクールを出たが、自分の生活が縛り付けられるのがなんとなくイヤで、親の願いをよそに、信仰の世界とは無縁である。そんなわたしが、同じ職場の市村隆と恋に落ち、婚約した直後の事故だった。わたしの人生は、彼の交通事故で、ほんの少し予定外の展開になりそうだった。そう、“ほんの少しの回り道”、その時はそんな軽い気持ちだったのだけれど……。

(数日後、医師の診察を受ける隆)

医師                    どうですか、市村さん。まだかなり痛みますか？

隆                        先生、事故の直後よりはかなり良くなりました。薬が切れるとまだ痛いですけど。まあ、これも生きてる証拠だと思ってあきらめます。ただ、時々、頭がギュッと締めつけられるように痛むことがあって。

医師                    そうですか。実は、先日のCTとMRIの検査結果なんですけど……。事故の際に、前頭部を激しく打った影響で、脳の内部に細かい損傷が見られます。手や足などの運動機能には全く問題はないはずですが、ただ……。

隆                        何か障害が残るんでしょうか？

医師                    今の段階では、はっきりとは申し上げられませんが、何らかの影響は出る確率が高いです。今のところ、言語や記憶、全身の感覚にも兆候は見られませんが、経過を見ていきましょう。

隆                        ……分かりました。

真理子N                隆の快復は順調に見えた。もともと学生時代に野球で鍛えた体力もあり、傷口の抜糸が済むと、もう、少しずつ体を動かし始めていた。脚のギプスが取れたら、本格的なりハピリ開始。会社も好意的で、完治したらいつからでも職場復帰できる見通しだった。隆は本当によく頑張っていた。だからわたしも、精一杯、彼を支えたいと心からそう思っていた。実はその時から、わたしの本当の苦しみが始まるとは夢にも知らずに

(効果音)                (「トントン」ドアノック。「ガチャ」病室のドア、開く。)

真理子 隆、気分はどう？ 今日是由美子と健二郎さんが来てくれたのよ。

白石由美子 こんにちは。お邪魔しまーす。

重松健二郎 よっ、隆。大変だったな。具合はどうだ？

隆 ああ、悪いな、二人とも。わざわざ見舞いに来てもらって。見ての通り、情けないことになっちゃったよ。でも、おかげ様で順調に快復してる。

由美子 “おかげ様”って、市村さん、真理子のおかげでしょ？ 聞いてるわよ。真理子、会社の帰りに毎日寄ってるそうじゃない。

健二郎 へえ、毎日？ すごいなあ、真理ちゃん。献身的だなあ。

真理子 やだ、やめてよ二人とも。わたしはただ、隆の顔を見ないと心配で、それで……。

由美子 はいはい、分かりました。真理子は尽くすタイプだもんねえ。あたしは違いますからね、健二郎。そういうの、期待しないでよね。

健二郎 あー、何だよそれ。おれ、結婚、考え直そうかなあ。

由美子 考え直すなら、今のうちよ。式場のキャンセル料払うの、イヤですからね。

隆 何だ、お前たち結婚決まったの？ 早く言えよ。おめでどう。

真理子 由美子、おめでどう！ 健二郎さんも。

由美子 ありがとう。

健二郎 ま、そういうわけだから、隆も早く良くなって、絶対二人で式に出てくれよ。

隆 ああ。

真理子 もちろんよ。  
(それからしばらくたって)

ナレーション そして事故から3か月ほどたったころ、隆の本格的なりハビリが始まった。長いこと歩いていなかった脚の筋肉は落ち、初めは5、6歩 歩くのがやっとのようだった。けれど持ち前の負けず嫌いと粘りで、トレーナーも驚くほどの勢いで、歩く距離を伸ばしていった。だがそのころからわたしは、彼に対して小さな違和感を抱くようになっていった。どこがどうとは言えないけれど、何となく以前の彼とは違うような、引っ掛かりのようなものが、少しずつわたしの中で大きくなっていったのだ。  
(リハビリルーム)  
(歩行器に頼りながら歩く練習をする隆。見守る真理子。)

トレーナー はい、ゆっくりでいいですよ。1、2、3……。

隆 (息を切らしながら) 4、5、6、あつ。

(効果音) (「ガタッ」隆転ぶ)

トレーナー 大丈夫ですか？ はい、ゆっくり起きましょう。少し休みますか？

隆 いえ、もう一回お願いします。1、2、3、4…16、17、18、19…。ああっ！

(効果音) (「ガタッ」激しく転ぶ)

真理子 隆、大丈夫？ 隆、頑張っって！

隆 うるさい！（どなる）

（効果音） （「ガッターン」いきなりツエを投げつける）

隆 うるさいんだよ！ 余計なこと言うな！！

真理子 ご、ごめんなさい、わたし……。

隆 お前は出てけよ。早く出ていけ！

真理子 隆……。 <sup>ぼうぜん</sup>（呆然とする）

ナレーション カットとなってわたしをどなりつけた隆は、まるで別人のようだった。そして、以前の温厚な彼からは想像もつかないような言動が、日に日に多くなっていったのだ。  
（診察室。医師、真理子、隆の母。）

隆の母 脳の、損傷… ですか？

医師 はい。前にご本人にはお話ししたのですが、事故で強く打ったことによるものと思われる。今のところ、体を動かすことには支障がないようですが、感情をコントロールするのが難しい時があるようですね。

真理子 はい。最近、突然大声を出したり、ちょっとしたことでカットになって、物を投げたりするんです。

隆の母 前は、絶対にそんなことをする子じゃなかったのに……。事故のせいなんではしょうか？

医師 おそらくそうでしょう。何かしらのストレスが引き金となって、本人の意志とは別のところで、脳のセンサーが過剰に反応してしまうんです。だから、はっと我に返った時には反動で、ひどく落ち込んでいるはずですよ。

真理子 そうだったんですか。わたしはてっきり、リハビリが思うようにいかないの、イライラして当たり散らしているのかと。先生、それって治るんでしょうか？

医師 分かりません。ある程度、薬で抑えることはできます。ただ、脳の場合は、手足のケガとは違って、傷口が自然にふさがるように治ることはないのです。ご本人が一番苦しいと思います。どうか周囲の方たちは、理解してあげてください。

ナレーション あの事故で隆が背負ってしまった重荷は、予想以上に大きいものだった。わたしはこれから先、本当に彼を支え続けていけるのだろうか？ そんな不安が心に芽生え始めていた。それと同時に“何があっても自分が支えてみせる”という、半ば意地にも似た決意も生まれていた。だが、そんな強い思いが、知らず知らずに、自分自身を追い詰めていくことに、わたしはまだ気づいていなかったのだ。  
（隆の病室）

隆 真理子、この間のごめん。おれ、ついカットになって大きな声出して。最近ダメなんだ。すぐイライラして、感情的になると、自分でも止められなくなって……。おれたちの結婚、一度白紙に戻そうか。 そのほうが真理子も気が楽じゃないか？

真理子 何言ってるの、隆。わたしはずっと一緒にいるって言ったじゃない。大丈夫だよ。きっと

良くなるって。もし完全に治らなくたって、病氣と仲良くやっていけばいいじゃない。ね、あせらないで。

隆 分かったようなこと言うなよ！「病氣と仲良く」って何だよ！仲良くなんてできるわけないだろ。おれは治りたいんだよ！（どなりながら、物を投げつける。）

真理子 隆、分かったわ。分かったから。お願い、落ち着いて、隆。

ナレーション そんなやりとりを繰り返し、いつのまにかわたしの心の疲れは限界を超えてしまったらしい。とうとうある日、会社で仕事中に倒れた。過度のストレスによる“軽うつ病”のおそれがあるという診断だった。

真理子モノローグ わたしまでが？なぜこんな目に遭わなきゃならないの？なぜ？

ナレーション こんなうめきともつかないつばやきが、頭の中を冷たく素通りしていった。

<後編>

テーマ 人生はドラマ、あなたが主人公です。この度も、「この指ドラマ館」によようこそ。

ナレーション わたしは菊地真理子。婚約者の市村隆が交通事故に遭い、後遺症が残った。ずっと彼を支えていこうと決めていたわたしだったけれど、次第に限界を感じ始め、ついにストレスから倒れてしまった。

タイトル 横山ゆずり作「背負う人」その後編

(喫茶店で、真理子と由美子。)

由美子 そうだったんだ。市村さん、優しい人だったのにね。どなったり、物を投げたりなんて、なんか信じられないけどね。

真理子 わたしも最初は、何が起こったのかと思った。まるで別人みたいで、怖くなっちゃって。彼のせいじゃない、事故のせいだって、頭では分かってるんだけど。最近、なかなか病院に足が向かなくて。ひどいよね、わたし。冷たい女だよね。

由美子 やめなよ、自分を責めるのは。真理子、顔色悪いよ。そんなんじゃ、あなたの方が病氣になっちゃう。はっきり言うけど、わたしは、真理子が市村さんと別れるなら、それも仕方ないと思う。今のままだと、二人共倒れになっちゃいそうだもん。見てられないよ。ね、たまには息抜きしよう。ほら、同窓会の案内が来てたじゃない。久しぶりに学生時代の仲間と会ってしゃべれば、少しは気も晴れると思うけど？

真理子 悪いけど、わたし、今そんな気分になれない。

由美子 そんなこと言わないで、付き合っってよ。うんとおしゃれして、おいしい物食べて元気出そう。

真理子 ありがとう、由美子。

(効果音) (パーティーのガヤ)

由美子 あ、真理子、こっちこっち。

村田優子 うわぁ、久しぶり。真理子も由美子も、ちっとも変わらないわね。

由美子 優子！ あなたも。全然変わってない。

優子 ねえねえ、今日は小泉先生もいらしてるのよ。ほら、あっち。

真理子 え、小泉先生が？

由美子 本当だ。わぁ、懐かしい！

真理子N 小泉先生は、わたしたちがこのミッションスクールに入学したばかりの、中学1年生の時の担任だった。当時すでにベテランの英語教師で、分かりやすい授業と気さくな人柄で、生徒たちに人気があった。けれどもわたしたちが中学2年に進級する時、なぜか急に担任を降りられ、週に数回の授業だけを担当する講師になられたのだ。

由美子 相変わらずダンディーだわねえ。とても還暦すぎてるとは思えないわぁ。

優子 ほんと。ねえ、小泉先生って、わたしたちが中2の時、突然、非常勤講師になられたじゃない？ あれって、奥様の介護のためだったんですって。

由美子 奥様のカイゴ？ あぁ、病気とかの介護ね。お体悪かったの？

優子 そう。ちょうどあのころ、“若年性アルツハイマー”っていうの？ 発症なさったとかで。それで、先生がお世話をなさるために、授業だけの講師になられたんですって。

由美子 へえ、全然知らなかった。そんな大変そうな様子、まったくお見せにならなかったものね。

真理子 すごいわ、先生。

優子 ね。今もご自宅で介護なさってるって。このごろは症状が進んでしまって、先生の姿が見えないと、奥様とても不安がるんですって。「今日みたいな時は、訪問ヘルパーさんを頼むんだ」っておっしゃってた。

真理子 今も、って...、じゃあ十数年も、先生がずっと奥様のお世話を？ ダメだわ。わたしにはとてもマネできない。無理だわ。

優子 あらやだ、真理子ったら。あなた、まだ独身でしょ？ 結婚もしないうちから、相手の介護の心配なんて、気が早すぎるわよぉ。

真理子 え、うん、そうよね.....。

由美子 ね、小泉先生にあいさつしてこよう。

(効果音) (パーティーのざわめき。小さくBGM。)

由美子 小泉先生、ごぶさたしてます。

小泉先生 やぁ、こんにちは。しばらくですね、白石さんと村田さんと、菊地さん。お元気でしたか？

由美子 はい。先生、わたしたちの名前、覚えていてくださったんですね。

小泉先生 はい、もちろんですよ。担任した生徒のことは、忘れません。もっとも、女性は変わりますからね。美しくなりすぎて分からない場合もありますが。

優子 (笑い)まあ、先生ったら、そんな冗談おっしゃるところもお変わりないですね。(会話、段々小さく。F0)

ナレーション 久しぶりに会った恩師の姿には、男手一つで病気の妻を介護し続けて十数年、という悲壮感はなかった。むしろ、明るささえ漂わせていた。どうしてだろう。先生は、疲れ切って、すべてを投げ出して一人になりたい、なんて思うことはないんだろうか？

(効果音) (パーティーのガヤ、BGM)

小泉先生 どうしました、菊地さん？ 気分が優れませんか？

真理子 えっ、あ、いえ、すみません。ちょっとぼんやりしてました。

由美子 真理子、大丈夫？

真理子 うん、平気 平気。ごめんね、わたしたら。

小泉先生 ならいいのですが。無理はいけませんよ。無理して我慢しすぎると、心が悲鳴を上げますからね。わたしも、それで随分失敗しました。

真理子 先生が、ですか？

小泉先生 そうですよ。わたしは、失敗だらけの人間ですから。そうだ、わたしは今でも週に2回は英語を教えに行ってるんですよ。火曜と金曜です。よかったら、今度遊びに来てみませんか？

(真理子の部屋)

(効果音) (携帯電話の着信音、しばらく鳴っている。)

真理子 はい、もしもし。

隆 (フィルター音)もしもし、真理子？ おれ。

真理子 うん。どうしたの、隆？

隆 (フィルター音)いや、どうもしないけど、このごろ、話してないなあと思って。

真理子 ごめん、ちょっと忙しくて。

隆 (フィルター音)そっか。ならいいや。じゃ、またな。

真理子 うん。お休みなさい。

ナレーション いつしか、わたしは、隆の顔を見るのがつらくなっていった。

(効果音) (携帯電話の着信音。真理子、しばらく出ない。)

真理子 ……はい。

隆 (フィルター音)もしもし、おれ。

真理子 うん。何？

隆 (フィルター音)今、ちょっと話せるかな。

真理子 ……ごめん。……あした、朝早いから。

隆 (フィルター音)少しでいいんだ。

真理子           ほんと、ごめん。今日は……。

隆               (フィルター音)おれたち、……おれたち、もうダメなのかな。

真理子           えっ？

隆               (フィルター音)おれ、真理子を幸せにできないもんな。今のままじゃ、真理子の足を引っ張るだけだもんな。

ナレーション   その時、わたしは「そんなことないよ」とは言えなかった。だが、「ずっと一緒にいるよ」とも言えなかった。ただ、ひたすら自分が楽になりたかった。

真理子           隆、ごめん。本当にごめんなさい。あなたが悪いんじゃないの。だけど、だけど……このままだとわたしたち、お互いを傷つけ合って二人ともダメになっちゃう。(途中から涙声)一緒にいたら、苦しみが半分になるどころか、二倍になりそうな気がするの。だって、いくらわたしが頑張ろうって思っても、隆が落ち込んでてイライラしていると、そういう気分引きずり込まれちゃうの。隆も同じだと思う。だから、わたしたち、もう……。

隆               (フィルター音)(ささぎる)分かったよ。もういいよ。ごめんな。

(効果音)       (電話、切れる。「ツー、ツー」。)

真理子           (すすり泣く声)

ナレーション   隆が、医者から出してもらった精神安定剤を大量に飲んだ、と聞かされたのは、それから2日後のことだった。彼をそこまで追い詰めたのは自分だと思うと、わたしは打ちのめされた。彼を突き放してみたところで、結局わたしは楽になんかなれない、いや、なっちはいけないんだ。そんな思いが押し寄せてきた。そんなわたしの心に、先日の小泉先生の言葉が浮かんだ。

小泉先生       (エコー)無理はいけませんよ。無理して我慢しすぎると、心が悲鳴を上げますからね。わたしも、それで随分失敗しました。

ナレーション   先生に話を聞いてもらいたい、という思いで、わたしは懐かしい母校を訪ねた。

(音楽)           (BGM 礼拝の賛美歌)

小泉先生       やあ、菊地さん、よく来てくれました。ちょうどお昼のチャペルがあります。久しぶりに出てみませんか？

真理子           はい。

(教官室。真理子と小泉先生。)

ナレーション   わたしは、小泉先生に、それまでのいきさつのすべてを一気に話した。

小泉先生       そうですか、そんなことが…。大変でしたね。

真理子           すみません、こんな話、聞いていただいて。先生の方がずっと大変な思いをなさっているのに。

小泉先生       ああ、家内のこと、ご存じでしたか。

真理子           はい。

小泉先生       彼女が“若年性アルツハイマー”と診断された時には、わたしも途方に暮れまし

た。何をどう助ければいいのかも、全く分からなかった。もしわたしがクリスチャンでなかったら、妻と二人で無理心中をしていたかもしれない。

真理子 まさか、先生が、そんなこと。

小泉先生 いいえ、わたしはそれほど弱い人間なんです。だから、この十数年間、ある聖書の言葉をかみ締めるように生きてきました。覚えていますか、聖書の授業？ イザヤ書というところがあったでしょう？ その46章の4節です。

(効果音) (聖書を開く音)

小泉先生 「あなたがたが年を取っても、わたしは同じようにする。あなたがたが白髪しらになっても、わたしは背負う。わたしはそうしてきたのだ。なお、わたしは選ばう。わたしは背負って、救い出そう。」

神様は「わたしが背負う」と言ってくださった。そうなんだ。神のみ子イエスは、わたしの自己中心の罪をもすべて背負って、十字架で死んでくださったんだから、わたしが重荷に苦しむことはないんだ。目の前がパッと明るくなりましたよ。それまでわたしは、自分が家内の人生まで背負わなくては、と思っていました。でも、そんなことはできるはずがない。それどころか、自分一人の人生だって重すぎるのに。あなたもそうではありませんか？ そんなに力持ちではないでしょう？

真理子 そうなんです。おっしゃる通りです。

小泉先生 たまたま、あなたもわたしも、パートナーが身体的に痛みを持っていたから、重荷を意識せざるを得なかったけれど、きっと、健康な人同士でも同じだと思うんです。夫婦でも、親子でも、友人でも、本当にだれかと向き合って、深くかかわって生きていこうとすれば、必ず傷つけ合ったり、痛みを感じたりするものです。それが、“共に生きていく”ということではないでしょうか。

真理子 痛みを感じながら、共に生きていく……。

小泉先生 そう。そして、わたしたちが負いきれない重荷も、神様はちゃんと背負ってくださる。だから、大丈夫ですよ。丸ごと全部、神様に預けてしまえばいいんです。なんだか、お説教くさくなってしまいましたね。ごめんなさい。

真理子 いいえ、先生、ありがとうございます。わたし、少し心が軽くなりました。

小泉先生 それはよかった。自分の心が軽くなると、相手の荷物を少～し持ってあげる余裕ができますから。

ナレーション 帰り道、わたしの心を不思議な安らぎが包んでいた。

真理子モノローグ 「わたしは、背負う。」…そうなんだ。そういえばキリストも言われたんだ。「重荷を負って苦労している者は、わたしのもとに来なさい」って。

ナレーション 遠い日に、学校で毎週のように聞いては耳元を素通りしていったイエス・キリストの言葉が、十字架のイメージとともに、このイザヤ書の神の言葉と一瞬に重なったような気がした。

真理子モノローグ 隆、ごめん。わたし、あなたのそばにいる。できるかどうか自信ないし、また気持ちが揺らぐかもしれないけど、今はあなたと一緒にいたい。いさせて。

ナレーション わたしは、心の中で、そうつぶやいていた。“背負ってくれる方がいる限り、これは隆との新しい始まりになるかもしれない”とかすかに予感しながら。

<完>